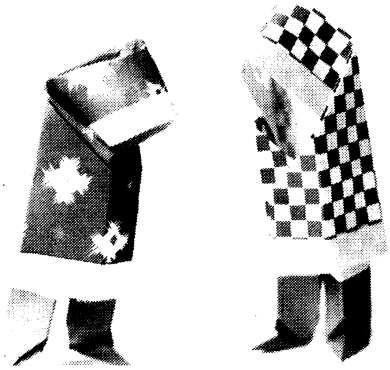


11月になると，日本各地での初雪の知らせが急に聞かれだします。

茨城県での初雪は例年なら１月３日だそうですが，今年はどうも異常気象の気配がありそうですから，どうなることやら。

初雪が降ればもうスキーのシーズンも間近です。家の中にとじ込もっていないで，子供の頃のように外に飛び出しましょう。

今月のおもな行事

○１日	静岡県統計大会
○１～２日	生産動態統計ブロック会議（群馬県）
	小売物価統計調査ブロック会議（十王町）
○９日	茨城県統計大会（水戸市）
	埼玉県統計大会
	神奈川県統計大会
○10日	群馬県統計大会
	山梨県統計大会
○11～12日	石岡市統計大会
	家計調査ブロック会議（千葉県）
○18，21～22，24～25日	工業統計調査市町村説明会
○24日	岩井市統計大会
○28日	大野村統計大会
○29～30日	消費者動向調査ブロック会議（埼玉県）

● 特集

統計法制定30周年記念

第28回全国統計大会終る

― 福井県福井市 ―

宣　　言

統計法の制定をみて30年，この間，わが国の統計は情報化社会の形成とともに飛躍的発展を遂げた。

しかし，今日，わが国の経済・社会は流動する内外の諸情勢によって大きな転換期を迎え，統計への期待はますます増大している。

これは，統計が，経済の高度発展により生じた複雑な現代社会を解明し，きたるべき次代の要請に的確に対応する施策を講ずる重要なものとして認識されているためであり，今後，国民生活の向上に寄与する，広範でより精度の高い統計の実現を可能とする体制の拡充・強化が急務である。

ここに，第28回全国統計大会が開催されたことは真に意義深いことである。われわれは，統計のもつ今日的意義を再確認し，山積する課題に対して真摯にとりくむ強い使命観をもって邁進することを誓い，つぎのとおり決議し，宣言する。

1．統計教育の振興に努めるとともに，統計思想の普及・徹底を図るため，「統計の日」を国民的行事に高めること。

1．国民生活に密着し，その福祉向上の推進に資するための統計の開発と充実に努めること。

1．国民負担の軽減と統計行政の合理化を図るため，統計調査の重複を除き，統計体系の整備・簡素化を進めること。

1．地方における統計利用の拡大を推進し，調査結果の速やかな還元に努めること。

1．統計調査員の確保と充実を図るため，身分保障・待遇改善・研修等の制度化を図ること。

昭和52年10月28日

第28回　全国統計大会

去る10月28日（金），福井県福井市春山にある福井市文化会館に約2,000人からの統計マンが集い，第28回全国統計大会が盛大に開催されました。特に本年は統計法制定30周年にあたるとあって，会場の雰囲気はいやが上にも高まりました。

茨城県からも，県内各地から多くの統計マンが参加して，大会を大いに盛りあげました。

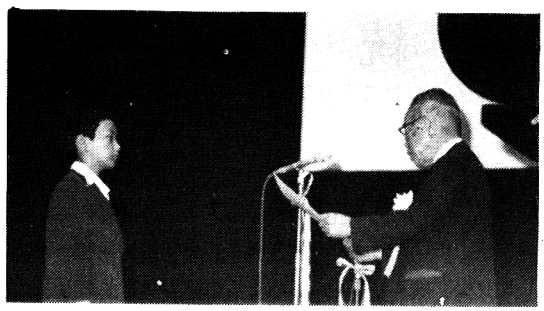
大会は，有沢広巳大会長のあいさつに初まり，中川平太夫福井県知事，大武幸夫福井市長のあいさつが続きました。

表彰は，大内賞，各省庁大臣表彰，全国統計協会連合会長表彰，統計グラフ全国コンクール入選者表彰などが続きましたが，本県からは次の方々が受賞されました。

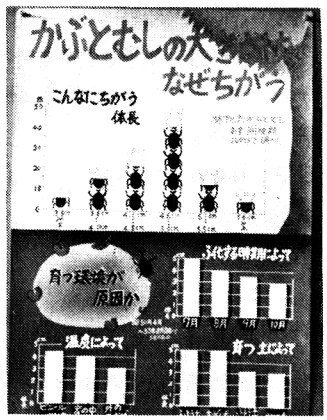
特に統計グラフ全国コンクールでは，第２部で特選になった柳田高志君が，第２部の入選者代表として登壇し，賞状を受けました。

この他，建設統計調査で本県の２つの事業所が受賞されました。

大会は，伊賀隆神戸大学教授・兵庫県統計調査審議会副会長の記念講演「これからの経済が必要とする統計」を最後に幕を閉じました。



代表して受賞する柳田高志君



特選になった柳田高志君の作品

文部大臣表彰			茨城県	
全国統計協会連合会長表彰			野口貢	
			鈴木宗男	
統計グラフ全国コンクール入選者				
1部	4席	結城市立江川南小	3年	舟橋洋子
			3年	中山由紀子
			3年	大嶋美代子
	佳作	水戸市立新荘小	1年	石川裕子
	佳作	真壁町立樺穂小	1年	小ばやしあつ子
	佳作	結城市立山川小	3年	堀越正人
2部	特選	結城市立結城小	6年	柳田高志
	7席	結城市立山川小	6年	江連治美
			6年	江連陽子
			6年	小林茂美
	9席	結城市立山川小	6年	平間明美
			6年	永井浩美
3部	5席	結城市立結城南中	1年	柿沼法子
			1年	田部井充子
	佳作	下妻市立東部中	2年	山口明

■統計の窓「論壇」

統　計　偶　感

松田道夫

外地から旧軍人その他が続々と送還されてくる一方，内地では，何百万人という餓死者が出ると報ぜられ，何とかして食糧を輸入してもらおうと占領軍に対して努力が払われていた時機に，統計法は，誕生した。

敗戦による虚脱と飢餓の中で，一見不急不用とみられかねない統計に関する法律が逸早く成立したことに対しては，それなりのいきさつがあったことであるが，ここではその説明は省略し，立法に関係された方々の情熱と適確な判断力に敬意を払うことに止めよう。

統計法は，今年の5月1日をもって，施行後30年を経過したことになる。統計業務の一部を担当している者として，この機会に，感じていることの一，二を述べてみたい。

「環境の悪化」ということ

数年前から，統計関係者の間で「統計の環境の悪化」又は単に「環境の悪化」という言葉が屢々聞かれるようになった。

始めて統計業務に従事することになった人がこの言葉を聞かされると，何か異様な感じを受けるのではないかと思う。仕事の中に問題点が幾つかあるというのであれば，それは当然のことであるし，仕事がしにくいということであれば，それはぜい沢だ。

環境の悪化というのは，統計調査を実施する場合，申告者が不在で調査できない，申告者が居ても十分調査に応じてもらえない，調査票の回収に予定以上の時間がかかる，これらの事情を反映して統計調査員を引受けてくれなくなった，調査従事者の交通事故が心配だ，統計担当職員について……というように色々の意味をこめて前より仕事がしにくくなったことを言っているものと思う。

環境の悪化という言葉に何となく馴染まないまま聞いたり，読んだりしているうちに，次のようなことに気がついた。

その一は，この言葉が誰も傷つけないことである。

最近，挨拶とか，国に対する要求や説明文の中で屢々聞いたり，見かけたりするが，使っている方も受取る方も枕言葉としてしか理解していないような感じがする。言葉は使っている間に本来の意味からずれて特別の意味で使われるようになるものがあるが，環境の悪化という言葉も，同じ運命をたどりはじめたようだ。本来，この言葉で示される内容は，統計の業務を担当する者にとって極めて深刻なものがあると思うが，あまり繰返して使われるようになると聞く者の胸を痛めさせる響きが少なくなる。

その二は，この言葉を使っている人以外の事情が悪化しているのであって，この言葉を使っている人は何ら関係がない，すなわち，周囲だけが悪いとしているような感じが言外に漂っていることである。

統計調査という仕事は，沢山の人が広い地域にわたって一斉に従事し，それが終ると別のグループにその結果が伝えられ，次第にステップを登りながら最終グループの人達によって報告書が出されるという場合が多い。いずれかのステップを担当している者から他のステップの事情が悪くなったと言い，これを聞いた方では自分の属するステップには問題がないが，他のステップの事情が悪化したというすれ違った理解をしている面があると思う。

環境が悪いという短い言葉の中に多様の意味をこめて使い，相手にその全部の理解を求めることは，無理だ。悪化しているのは，環境ではなくて，自分自身ではないのか。

「統計の真実性の確保」ということ

「統計の真実性を確保」するという堅苦しい言い方をしたのは，統計法の目的の最初に使ってある言葉を引用したためである。

「統計の環境が悪化」しているとすれば，その悪化した環境の中で作られた統計は，環境のよかった時代のものに比べ，やはり悪くなっていると見られても仕方がないのであろうか。

若し悪くなったとしても，その内容は，千差万別であろう。結果の公表が遅い，結果報告書が使いにくいなど色々考えられるが，先づ心配となるのは，統計数字が現実を示さなくなったのではないかということであろう。勿論，正確な申告をしてもらうべく各省，地方公共団体，統計調査員は，それぞれの立場で知恵を出し合い努力を積み重ねているにしても，正しい申告の提供については，一層の配慮が望まれる。

環境の悪化などという言葉が作られる前から，例えば，次のようなことは周知のことであった。3年ごとに実施されている事業所統計調査の工業事業所数と商業事業所数の動きに対し，工業統計調査と商業統計調査の対象事業所数の動きが，乖離を示しながらも，事業所統計調査の結果に引張られている形を示していること。また，国勢調査による年令別人口が5年前の国勢調査による5歳若い人口と比較した場合に増加している年令階層が認められること（海外からの相当な人口流入がない限り，通常は死亡者の分だけ減少するはず）などである。

また，国の実施したセンサスの数字と府県が独自に実施した調査の結果との喰違いとか，特定の調査ではあるが，統計調査員が調査票の数字が過少申告であることを推定できてもその訂正を求めることが容易でないという話もある。

統計には，サンプリング・エラーのほかにノン・サンプリング・エラーという厄介な存在があるが，従来からの問題の上に環境悪化の影響が加わり，単なるエラーを越えて，欠陥統計とも言われるような統計が生まれないよう注意したい。

最近では，自動車に何らかの欠点が認められたときは，それを発表し，速やかに部品の交換などが行われている。この制度が実施されるまでには，相当の反対論があったものと想像できるが，実施してみると少なくともユーザーにとって大きな安心感を与えている。統計についても，機会あるごと製品検査に努め，数字の異常については，速やかにユーザーに説明されることが望ましい。

この説明が積み重なることにより，環境悪化の部位と程度も明らかになる筈であり，その対策を通じて，この時点から本当の意味で統計の真実性の確保が始まるものと信ずる。

前
（行政管理庁統計主幹）